

健康文化

## 窓のポエジー

高田 健三

海外旅行に出かけた折に、それぞれの国の異文化に触れることは、誰しも楽しみの一つであろう。科学と同様、「国境」のない絵画、音楽などの芸術作品は受け入れやすいが、生活習慣、言語、食物などは必ずしもそうは行かないことがある。しかし、私など、食い意地の張っている者にとっては、その土地土地の素材が生かされている食べ物に出会うと嬉しくてたまらなくなる。それも上等なレストランとは限らず、街の人達が日常行く店などで見つけると、気どらない雰囲気と相まって楽しさも増すというものである。近頃は海外どこでも、上等なレストランでは英語が通じたり、パリなどでも、日本語のメニューを用意している所さえあるが、いわゆる下町の店ではそれは期待できない。それどころか現地語のメニューは厄介なものの一つである。かつてナポリにある臨海実験所を訪ねた時のことである。当時そこに留学していた知人と街で食事を共にすることが何度かあった。そんなある日、あそこはうまいという下町のレストランに入った時のことである。港町であるナポリは魚介類が豊富なので魚料理を食べようということになった。しかし、我が友人はイタリアに来て未だ数カ月しか経っていないので、料理の種類や内容のイタリア語までは分からないという。勿論私も分からない。ウェイターとメニューを前にして片言のイタリア語でやり取りしたが、どうにも通じない。すると隣のテーブルで食事をしていた家族らしい一団のイタリア人の年長の男性が、メイ アイ ヘルプ ユー と声を掛けてくれた。我々の問答の様子を見かねて英語でイタリア語の通訳をしてくれるという。それはありがたいということで、早速、彼を通してメニューを選ぶことになった。ところが、私が指した魚の料理の所で、彼は勢いよく、ザッツ フィッシュ と言ってしまって、我々は目を合わせて思わず笑ってしまった。彼とても、舌鰈は分かって、鱸や鯛の英語名までは知らなかったのである。十分に役に立たなかったと申し訳なさそうな態であったが、それをきっかけに話がはずんで結構楽しい夕食になった。しかし、その時食べた魚は何であったのか結局分からず仕舞いであった。

翌日の夕方は、素材の分かったものを食べようということになって、ナポリ

湾に面した少々気のきいたレストランに出かけた。店の表に魚や貝が並べてあって、自分の目で確かめることができる。ふと見ると、日本のアサリに似た二枚貝が目についた。メニューを見るとボンゴレを冠した料理があったので、あれはボンゴレだと判断し、まずそれを頼むことにした。ところが、オーナーシェフらしき人物が出てきて、ボンゴレは春から夏までのもので、10月の今、店にあるのは別のもので味も違うという。旬がなくなった日本とは異なり、時季が過ぎると使用しないのである。残念至極であったが、同じ二枚貝の仲間だから、あれで“ボンゴレ風”を作ってくれと頼んだら、ボンゴレ料理ではないことを散々念押しされた上で応じてくれた。我々が日本に帰ってから、本場のボンゴレ料理を食べてきたといわれるのをいさぎよしとしない料理人気質の現れなのだろうか、ごまかしのない頑固さには敬服させられた。イタリアワインのグラスを傾けながら、ふと目を移すと、窓越しに、とっぷりと暮れたナポリ湾の水面に、ナポリ民謡で有名なサンタ・ルチア港の灯がゆれていた。カンツォーネは聞こえてこなかったが、ナポリの風情そのものがその窓の中にあった。耳に届くイタリア語の韻にもなぜか違和感はなかった。

その後、アメリカに渡り、ボストンの北にある町の会社に発注してあった大型実験装置の進捗具合を視察した帰路、シアトルに立ち寄った時のことである。ぶらりと入ったフィッシュマンズ・ワーフのレストランで見た夕陽の光景は、しばしフォークの手を止めさせるほどのものであった。テーブルが窓から離れた所にあったことも幸いして、海側の壁面にあるいくつかの窓越しに、黄金色に輝くシアトル湾を前景にして、彼方にオリンピック国立公園の連峰と思わしき山々のシルエットが浮かんで見えていた。照明を落とした室内から見るそれぞれの窓の景色は、構図、色調が異なっていて、展覧会場で壁に掛かった絵を一つ一つ見ているような錯覚さえ覚えさせるものであった。窓とはこういう効果をつくり出すものかとその時も思った。

昨年秋、家内を伴ってカナダを訪ねる機会があった。その最後の宿泊地は、ユネスコの世界遺産にも指定されているカナダ東部の古都、ケベック市であった。かつてフランス領時代の文化を色濃く残す城塞都市とあって、石畳の街並みは、北米大陸で最もフランス的だといわれている。その城塞の名残の東外れ、セントローレンス川縁の高台に我々のホテルは立っていた。赤レンガの壁に青銅の屋根がよくマッチし、所々に大小さまざまな尖塔を配した壮大な建物は、19世紀末に建てられたものとはいえ、中世の城を思わせる風格を備えている。大きなホテルのロビーがもつ華やかである種の喧噪を後にして、ボーイが案内してくれた部屋に入るなり、思わずすばらしいと声に出るほどの眺めが、正面

の壁にある縦長で、クラシックな縁取りのしてある窓の向こうにあった。部屋は上層階の南東角にあったので、南側の窓からは、セントローレンス川の遙か上流が望まれ、最初に目に入った東側の窓には、左手前に大小の尖塔が見え、船を浮かべた洋々たる川の流れの先には、夕日を浴びたオルレアン島の端が浮かんでいて、どこかで見た油絵を見ているような気がしたのである。それだけでも素晴らしいと思っていたのに、旅情のクライマックスは翌朝に訪れたのである。家内の呼ぶ声に目を醒まされたのは、未だ夜も明けやらぬ頃であった。家内の指す東の窓に目を移すと、そこに幻想的な夜明けの光景が、絵のように浮かび上がっていたのである。島陰から今にも昇ろうとする太陽の真っ赤な光芒が、明けやらぬ夜空に浮かぶ雲の下を赤く焦がし、窓枠の下縁一杯に広がるセントローレンス川の満々たる川面を朱色に染めていた。その赤色の洪水の中にオルレアン島も左手前のとんがり帽子の屋根もただ影絵のように浮き出たのである。部屋の中は未だ暗いので、赤と黒の風景を、クラシックな窓枠が切り取って、格好の額縁となっているのである。この窓にしてこの風景であった。第二次大戦も終わり頃の1944年、ルーズベルト大統領とチャーチル首相がこのホテルで会合し、あのノルマンディー上陸作戦を練ったという。彼らも見たであろうこの光景に、私はこの建物を建てた人物のロマンチズムを感じたが、当時彼ら二人は何を感じたであろうかと思ったりもした。

窓枠でトリミングされた風景にはしばしばすばらしい芸術作品となるものがあり、旅先でのそういう場面との遭遇は、私の密かな楽しみの一つである。ところが最近になって、印象派や表現派の画家達が、窓をモチーフにした作品を結構描いていることを見つけたのは収穫であった。私が知る限りでは、その中でも、アルベール・マルケやシャガールは「窓」に特別の思い入れをもった画家らしい。私の最も好きな一人であるマルケは、フォーヴィズム創始者の一人であるが、やがてパステル調の穏やかな色調の風景画を創り出した画家として知られている。彼の絵は、なぜかどこかで見たことのある心象風景と重なるのである。伝記によれば、マルケは窓からの眺めをこよなく愛し、時間があればいつも窓に向かって、時には港を眺め、またセーヌ川を見下ろしていたという。いくつもの窓の作品にしても、階上の窓からの視角で捉えた水のある風景にしても、彼独特の人間生活に対する優しさが感じられるのは、そういう彼の感性に由来するのであろうか。一方、自叙伝によれば、自分自身、絵筆をもって一度も街を歩いたことはなく、いつも窓からの景色を描いていたというシャガールも、窓のある絵をいくつも描いているが、マルケとは異なり、そこには窓外の景色に托した彼自身の生命の息吹が一杯に溢れている。面白いことに窓を描

いた作品には、他に見られるような彼特有の説話的幻想性が影をひそめているのである。彼にしても、窓のある空間は現実の世界なのであろうか。ところが、「The Conversation」というマチスの作品では、正面に据えられている窓は、深層心理上のものであるらしい。マチス自身を現す屹立した男性と、窓を挟んで椅子に座るマチス夫人とは、表題に反し無言で対峙し、そこにはある種の緊張感が漂っている。Sister Wendy Beckettによれば、画面中央の窓は唯一の逃げ口を現したものだという。当時、文学や芸術に大きな影響を与えたフロイトの世界を借りたものなのだろうか。室内の雰囲気とは対照的に、窓の外には緑の芝生と花壇が見え奇妙なバランスをつくり出しているのである。

いずれにしても、西欧の画家達が、いろいろな思いを窓に感じとっていることを知って、私なりに納得であった。ところが、私自身が寡聞にして知らないだけかも知れないが、日本画にはそれに類するものがないことに気がついた。これはどうやら日本家屋と西欧の家屋との構造の違いが、その底にあるのではないかと最近思うようになった。日本と西欧の風習の違いをテーマにした英語のテキスト(K. Tobioka & D. Burleigh)の一節によれば、西欧文明の発祥は苛酷な環境に根ざしているがために、建物は外壁が厚く堅牢で窓は小さく、「イギリス人の家は城である」という諺にもあるように、外敵の侵入に対する備えをもっているのだという。これに対し、本来の日本家屋は、開口部が広く、外界とは戸、障子で仕切られているだけで、取り払えばそこはすぐに自然と共通の空間なのである。これは我が国の文化が穏やかな自然の中で農耕を主体にして発展してきたからであろう。障子を開ければそこは庭。外を窺う窓の必要性は見当たらない。日本画の名品に、山水や花鳥風月など、自然の中の“目線”で描かれたものが多い理由はその辺りではないかというのが私なりの結論である。

ヨーロッパを旅していると、窓いっぱい四季折々の草花を飾り、家屋にアクセントをつけている光景をよく目にする。西欧では窓はそれほどに日常生活に深く関わっているのである。オー・ヘンリーの珠玉の短編「最後の一葉」は、嵐の翌朝にも落ちずに残った一枚の蔦の葉が病床の少女に命の灯火を取り戻させる名作である。枯れかかった蔦の葉がストーリーを展開し、最後に壁に描かれた一枚の葉が主役として登場する。そして舞台は小さな窓なのである。

(同朋大学教授・名古屋大学名誉教授)